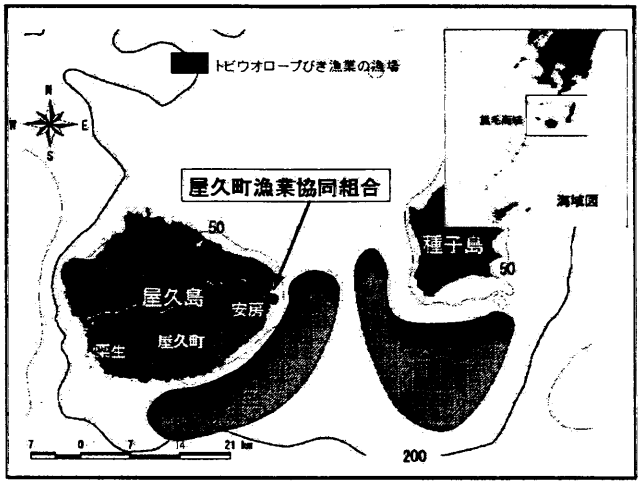
トビウオの銀座・屋久島に惚れた
－Ｉターンによる漁業への就業について－

屋久町漁業協同組合
田中　実

１　地域の概要

屋久島は，鹿児島市の南約１３０ｋｍの海上に浮かぶ，洋上アルプスとも呼ばれる世界自然遺産の島である。屋久島には上屋久町と屋久町の２つの町があり，屋久町は屋久島の南側に位置している。町の人口は，約６,９００人で，農林水産業が盛んな町である。



２　漁業の概要

私の所属する屋久町漁協は，屋久町東部の安房に本所，西部の栗生に支所がある。総組合員数は１２２名で，安房地区ではトビウオロープびき漁業，栗生地区では一本釣り漁業が主な漁業となっている。

平成１２年の漁業生産状況は，総水揚量１,３７６トン，総水揚額４億５千６百万円で，そのうちトビウオの水揚量は１,２５５トンで全体の９１％，水揚額は３億８百万円で全体の６７％を占めており，トビウオロープびき漁業が屋久町漁協の主幹漁業となっている。

屋久町漁協では現在，１４統の漁船がトビウオロープびき漁業を行っている。操業期間はほぼ周年で，１統あたりの平均の水揚額は約２千２百万円である。

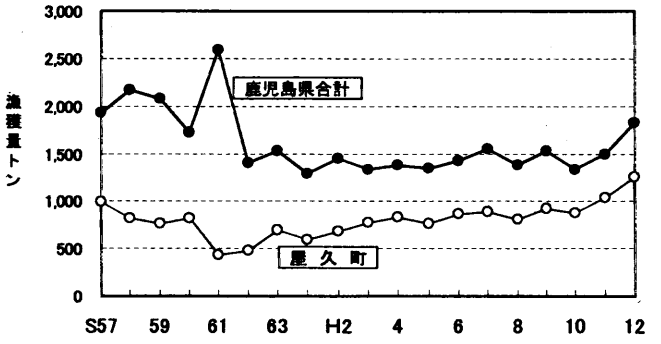


図1　鹿児島県のトビウオ漁獲量（農林水産統計年報）

３　実践活動課題選定の動機

私は，昭和６３年に東京から屋久島へＩターンした後，トビウオロープびき漁の乗組員として漁業に就業し，その後，平成１０年には漁船を購入して独立し，現在，Ｉターン者である３名の乗組員を雇い，トビウオロープびき漁業を営んでいる。

また，平成７年から９年には屋久町漁協青年部長を，現在は漁協監事を務めており，漁村地域における中核的な役職を経験させてもらっている。

今回は，私のＩターン，そして漁業経営の開始から現在に至るまでを振り返り，屋久島

で何故自分が独立できたのか，漁村地域を支える担い手の確保はどのようにあるべきか，等について考察した。

4　実践活動の状況

（1）Ｉターンと独立の経緯

私は，東京出身で，日本各地を旅行しながら，昭和６３年に屋久島にやってきた。当初は，住み込みで農業のアルバイトをしていたが，そのとき，以前トビウオ漁船に乗っていた友人からトビウオ漁の話を聞いて，興味を持ち，さっそく乗る船を紹介してもらった。しかし，船酔いがひどく，乗船初日には船が岸壁から離れた途端に気分が悪くなり，結局，何もできない有様であった。

当初はそんな状態であったが，漁業に就業してからなんとか８年が過ぎ，仕事も覚えたころ，親方に頼まれて，代行船頭をやったことが，独立のきっかけとなった。

漁労に関しては全て親方に任せきりだった私は，代行船頭を経験することで，乗組員の時には解らなかった部分が見えてきて，漁業に関する勉強の面白さがわかり始め，一年でも早く独立しようと考えるようになった。

独立と言ってもそう簡単なものではなく，まず，資金が問題となり，諦めかけていた。そのような折，普及員の方から，新たに漁業経営を始める人が利用できる無利子の沿岸漁業改善資金の話を聞き，これを借り受けて，独立することを決意した。

平成１０年に資金を借り受け，エンジンの付いていない中古船と中古エンジンを購入した。船の工事には，勉強の意味もあり，全ての作業に立ち会ったが，完成するまでに４ヶ月がかかった。

漁具は，乗り込んでいた船の網を参考にし，軽量で水の抵抗を受けにくい無結節の網を作った。網地は，まき網船が仕立てるときにでる端数の網を用いて，経費節減を図った。

独立し操業を始めると，少しでも多く水揚げをすることに気を使わなければならないところだが，それ以上に乗組員の安全に気を使い，なかなか漁労の方に集中できず，無情にも毎日の結果が水揚げ箱数に出てきた。先輩たちの半分も水揚げがない日が続いたが，独立したからには，根気強く続けるしか無かった。

乗組員の生活が水揚げに掛かっていることや，水揚げの結果が乗組員の志気を左右するなど，経営者である船頭の仕事は，本当にシビアなものだと痛感した。

水揚げ額は，独立して１年目は平均より少ないが1,700万円，２年目は人並みとなり2,200万円に向上，３年目は不漁のため1,600万円に減少した。

早く大漁組の仲間入りがしたいと思うが，独立して３年経った現在でも，まだまだ追いつけない状況である。

（2）操業に関する私の取り組み

乗組員の頃，潮のことや漁場のことは，全くと言っていい程無頓着であった私は，独立したとき，先輩漁業者たちにトビウオの探し方を教えてもらっても，なかなか理解できず苦労した。

そんなとき，ある話を聞き，トビウオの漁場形成についても何か海底の地形と関係があるのではないかと考え，早速，普及員に相談し，水産試験場が作製した海底地形図を手に

入れて２０マイル沖までの海底地形を頭のなかにたたき込んだ。そして，それ以来，トビウオが獲れた場所と潮流・水温のデータ，水産試験場ホームページから入手した水温分布の情報等を蓄積し，漁場形成の法則性などについて研究しているところである。

黒潮の変動等による漁場の移動など，データは蓄積されてきているが，漁場形成のしくみ等については未だにわからないことが多くあり，今のところ自分なりの推測が的中して大漁となるのは年に４～５回程度である。

一昨年から水産試験場がトビウオ資源調査を実施しているので，今後はその結果も参考にしながら，自分なりの漁場予測を続けていきたいと考えている。

（３）Ｉターン者等の受入体制について

屋久町漁協のトビウオロープびき漁業従事者は６４名いるが，約３割の１７名は県外からの比較的若い年齢のＩターン者である。

私がこれまで漁業を続けられたことや，多くのＩターン者がいることは，海のようにとても広い心を持ち，我々を受け入れてくれる先輩達がいたからである。

先輩から聞いた話によると，地域外の人を受け入れてきたことは，屋久島のトビウオロープびき漁業の発展に由来しているということである。

以前のトビウオ漁は現在の漁法とはやや異なり，２０名程度で組を構成し，産卵のため屋久島沿岸に集まったトビウオ（通称：時期トビ）が産卵した直後に網を入れ，大勢で海に飛び込み，網に追い込んで捕る漁法で，多くの労働力を必要とする操業形態であった。そのため，島外（特に与論島からの移住）から来島した人たちも水夫（泳ぎ手）など貴重な労働力として受け入れられていたようである。また，現在のロープびき漁が確立されてきた背景に，与論島から来た方達が大きく係わっており，現在でもロープびき漁の経営体には元来は地域外から来た方が多くいることから，地域外の方を受け入れやすい体制になっていったようである。

現在のロープびき漁は省力化が進み，以前より少ない４～５名程度での操業が可能となっているが，今なお，重労働であることから若い労働力が要求され，近年でも，屋久島の豊かな自然にあこがれて来島するＩターン者を受け入れているのだと思う。

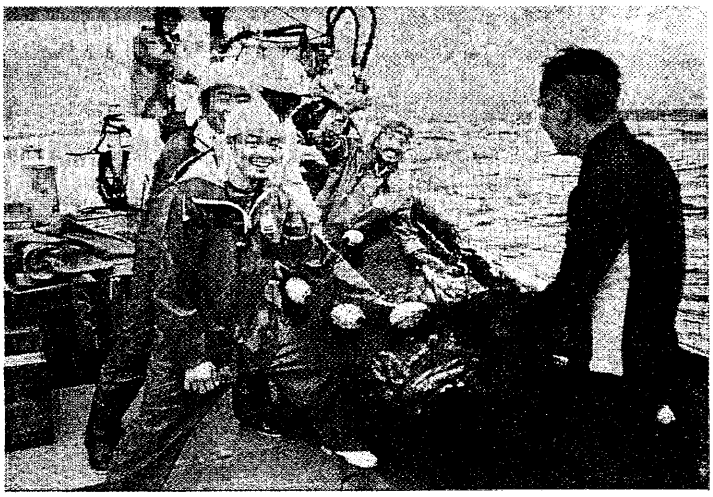
地域外の方を，労働力としてだけではなく仲間として受け入れてくれるからこそ，Ｉターン者のなかには，トビウオ漁に従事した後，独立して一本釣を営み，現在では漁協の理事に就いている方もおり，私も同じように現在は漁協監事を務めさせてもらっている。このように仲間として受け入れ，独立できるまで育ててくれた諸先輩方に本当に感謝している。

また，今では私も地域住民の一人として暮らしているが，屋久島で育った地元の方達は自然豊かな環境に包まれて育ったためか寛容な心を持っていると感じており，地域外から来た我々を温かく受け入れてくれた地域住民の方達にも感謝したい。

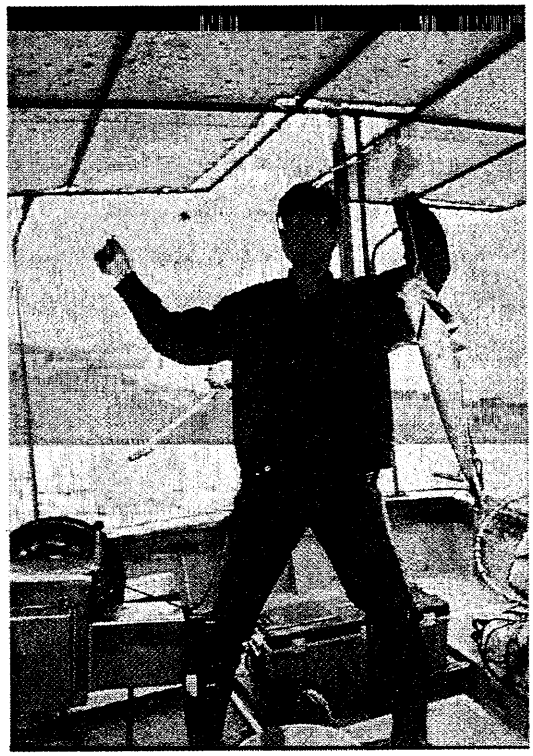
（４）担い手確保について

近年，漁業就業者の高齢化や新規就業者の減少が進み，漁業の担い手の減少が問題となっており，屋久町漁協においても，トビウオロープびき以外の経営体を見ると，やはり高齢化が進んでいるようだ。

新たな国の水産基本政策においても「担い手の確保」が大きな柱のひとつとなっていると聞いているが，就業者が減少する一方で漁業への就業を希望したり関心を持つ方が多いとのことである。



このような状況のなか，当地がＩターン者を受け入れて来た経緯があるためか，平成１２年１０月に，県や屋久町，屋久町漁協が協力して「屋久町漁業体験教室」が開催され，関東方面を中心に１１名の方が参加した。



参加者はトビウオロープびき漁船や一本釣り漁船に乗り,実際の操業を体験したが,参加した１１名のうち３名が屋久島に移り住み，トビウオロープびき漁や一本釣漁に従事し，今では我々の仲間として働いている。

これまでＩターンした方の屋久島へ移り住んだ動機は様々であるが，みんな自然が好きで屋久島に来て，海という正に自然を相手にした職業である漁業に魅力を感じているようである。

漁業体験教室を通じて感じたことは，漁村地域の活性化には，漁業を支える担い手の確保が必要であるため，漁村地域外からも就業者の確保を図り，Ｉターン者にも地域の活性化に参加してもらってもよいのではないか，ということである。

しかし，Ｉターン者を受け入れるにあたり，問題点も見られる。屋久町でも核家族化が進み，戸数のみが増え，住宅の空きがほとんど無く，漁業に就業したくても住む所がないというのが実情である。

このように，就業者の確保を図るうえでは，住宅不足が大きな問題であり，この点については，行政の協力も必要ではないかと感じている。

５　今後の取り組みについて

これまでの漁業は経験に培われた勘を頼りにする面があり，一人前と言われるまでに長い年月が必要であった。しかし，これから就業しようとする後継者のためにも，水温・潮流のデータを解析しながら，効率のよい操業を行うためのマニュアル作りを，私のライフワークとしてやっていくつもりである。県が現在建設している水産技術開発センターでも新たな漁業情報システムが新設されると聞いているので，是非活用したいと思っており，期待しているところである。

全国的に資源が減少している中，屋久町漁協のトビウオの水揚量は，近年，ほぼ横ばいに推移していたこともあり，トビウオ資源については，減少はありえないという思いがあった。しかし，昨年の秋，記録的な不漁を経験し，背筋の凍る思いをした。

現在でも，日曜日を休漁日とし，水揚げ時間も制限しているが，漁業者の間では，将来のトビウオ資源の不安を訴える人達も出てきている。現在行われている資源調査の結果などから，トビウオの漁獲可能量を設定するような資源管理も必要ではないかと思い始めたところである。今後はトビウオのような地域的な魚種についても資源量を考えながら漁獲していく必要があると感じている。

また，漁業就業者の確保・育成については，乗組員として就業する人はいるものの，地域の後継者となる人が少なく，後継者候補の確保も必要ではないかと思う。

Ｉターンし独立した私としては，若手漁業者の見本となるように，さらに技術の向上に努め，今後Ｉターンして独立を考えている人がいれば，今度は自分が先輩としてできる限り協力していき，これまでの先輩達と同様に屋久町のトビウオ漁の持続的な発展に努めていきたい。私個人としては，今後，誇りとプライドをもてる経営体になるよう努力し，将来は私の息子に継承していきたいと考えている。